

# 異文化理解教育における実践的アプローチの可能性

川那部和恵

(奈良教育大学教育実践開発講座)

## Possibility of Practical Approach in Intercultural Understanding Education<sup>1)</sup>

Kazue KAWANABE

(Department of practical and developmental Education, Nara University of Education)

**要旨：**異文化理解教育は「認知的局面」「感情的局面」「行動的局面」の3方向から総合的に行なうのが理想とされるが、一般にこのバランスが取れていないというのが現状だ。国際化の加速度的な進展の中で、時代は後者2側面の教育をもいっそう強く必要としているのに、なお知識重視の教育が主流であり、実践面への取り組みは明らかに遅れている。本研究はこの要請に応えるべく、実践面での教育方法について、アプローチの可能性を探ったものである。そこから、一案として、行動を司る意識（「感情的局面」）に視点を据えた授業プログラムを提案する。これは、21世紀ユネスコが志向する、共生およびその前提としての個の確立という、多文化共生教育の理念を視野に入れて構想された、学生の異文化交流実践に対する意識開眼を目標とするプランである。今秋、すでに教育現場での実践を経て成果が確認されたばかりのこのプログラムの全貌を、ここに記して総括する。

**キーワード：**異文化交流 intercultural communication、コミュニケーション communication、人間関係 human relations、国際結婚 mixed marriage (international)

### 1. 国際理解教育専修「総合教育基礎ゼミナール」の現場から

本学のカリキュラムには、第1年次を対象にした通年必修の科目「基礎ゼミナール」がある。これは2年次以降の専門教育へのスムーズな導入を図るための導入科目であり、本学の両課程いずれにおいても開講されている。実施の枠組は、各々の課程全体でということもあれば、コースごと、専修ごとなど、時と状況に応じてさまざまである。

筆者が主担当を務める総合教育課程・国際理解教育専修の場合、「基礎ゼミ」はまず最初の数回ほどを、当専修が所属する生涯学習コースの3専修合同の枠組で行ない、その後分離して、専修別の授業に入る。分離後の当専修の授業は大きく3つの柱で構成される。一つは、本学に在籍の留学生、および留学経験のある本学学生たちをそれぞれ招いて懇談する、国際交流の実践的な授業。一つは、『新・貿易ゲーム』という国際理解教育用の開発教育教材を使って行うシミュレーション体験授業<sup>2)</sup>。そして残る一つは、主担当4名の教員が、原則一人4回づつ分担するオムニバス方式の授業である。授業内容は担当者の裁量に任されており、

各教員とも自身の専門性を活かしつつ、自由にテーマを選び展開することができる。

この4回をどのような授業にするか。筆者にとってそれを毎回考え直すことは数年来の年中行事であり、毎年テーマやアプローチなど内容を刷新した授業を行うことを旨としてきた。テーマについては、たとえば、キリスト教文化という普遍的テーマを扱うこともあれば、新世紀初年の2000年に上げた終末論のように、当時ならではの時流に乗った思想のこともあり（問題の発端となった「世界滅亡論」のノストラダムスは16世紀フランス人）、あるいは2002年秋のことであったが、当時アジア西南部の油田をめぐる不穏な緊張度を高めていた米・ロの関係を対象にした、国際政治にまつわる時事的なテーマのこともあった（それは結果的に、アメリカのアフガニスタン侵攻の前夜であった）。

さて本年度2005年、この方向での試みも、来年度学部再編のため、最終回ということになる。筆者の担当日程は10月であったが、今回は、ここ何年か毎回視点を変えて扱ってきている異文化理解の問題をその延長で取り上げた。国際理解教育専修最後の「基礎ゼミ」として、ここに本年度筆者担当分の授業内容を記録し、総括しておきたいと思う。

## 2. 授業の内容

### 2. 1. テーマ「異文化間コミュニケーション」と今日の意義

異文化理解の問題は一般に二つの分野、文化とコミュニケーションに分けて捉えられる。教育においてもこの二面は分けて考えられており、前者は異文化および自文化の内容に関する知識面の教授、後者は、実際の接触において、文化背景の異なる人たちとの交流を円滑に運ぶためのスキルを身につけさせるための教育である。

わが国における異文化理解教育は、とくに1982年、日本ユネスコ国内委員会がその『国際理解教育の手引き』において、異文化相互理解の必要性を訴えて以来<sup>3)</sup>、また1986年には『臨教審だより』の中で<sup>4)</sup>、異文化相互理解を日本の重要課題と位置づけた臨時教育審議会からの働き掛けがなされたこともあって、いっそう活気づき活発な発展を遂げてきた。しかしながら、それは主に文化相対主義、つまり自・他の文化をそれぞれ優劣視せずに独自の存在と認め、両者間における相同を対比的に理解しようとする主義に依拠するものであったため、一般に、教育の焦点が、まずは文化一般いふなれば教養(culture-general)としての異文化理解におかれてきたきらいがある。

こうした知識偏重のあり方に対しては、早くから疑問視する向きがあった。むろん文化そのものの内容、たとえば自・他の文化の生活や習慣、思考や行動の様式、価値観、さらには異文化に対する先入観や固定観念の客観的理解や認識といったものは、交流関係において、誤解や摩擦を避けるためには欠かせない前提要素である。しかし、それだけでは充分でない、それに加えて、実地に則した振る舞い方を教える実践的な教育も不可欠だ、と唱える人々もまた少なくはなかったのだ。その一人、石井敏は次のように指摘する。

「異文化理解教育は、自文化と相手の文化について知識や情報を増やす認知的局面に終始しがちである。文化間の相互理解を深めるためには、認知的局面に加えて感情的局面と行動的局面も不可欠で、三局面がいれば立体的に作用し合うことが重要である。とくに異文化理解教育の一環としての異文化コミュニケーション訓練では、知的理解に加えて感情と行動の面の疑似体験が重視される」<sup>5)</sup>。

この発言は20年近くも前のものであり、爾来、この方面での教育の普及は進んでいる。とはいえ、その取り組みは今なお、現実の要請に対応しきれていないと言いき難い。というよりむしろ、昨今の国際化の加速度的な進展にともない異文化接触の機会の急増する現状においては、以前にもまして、交流の実践にかかわる教育が求められているというべきであろう。こうした要請を踏まえ、今回の授業では、異文化理解分野の

(その全体を射程に取り込みつつも)、とくに異文化間コミュニケーションの問題を重点的に扱うこととした。問題の所在を明らかにし、その解決策を検討する方向で進めていく。

### 2. 2. 4つの視点

「異文化間コミュニケーション」とテーマ設定した授業を、では、どのような視点と方向から行なっていくか。実践的教育といえは普通には、トレーニングやシミュレーションなどによる、具体的なコミュニケーション技能や適応力の養成を目的とする、石井のいうところの「行動的局面」の教育が想定されよう。しかし本授業の趣旨はそこにはなく、石井の図式では「感情的局面」とされているもの—それはすなわち「認知的局面」と「行動的局面」とを繋ぐ部分—ということができようが—、そのいわば人間の行動を司る中枢に位置する「意識」を対象とし、「意識」そのものに光りを当てることである。このような観点から授業を構築するに際し方針としたところは、目的、方向、手法等も絡めてだいたい以下の4点にまとめられる。

#### ①「当事者意識に目覚めさせる」：

ねらいはまず学生の意識改革にあった。その背景には本学学生の異文化交流に対する意識の低さがある。本学には常時数十名の留学生がいる。にもかかわらず、ごく一部の者を除けば、あまり留学生との交流があるようには見受けられない。留学生の本学学生に占める割合はおよそ5パーセント前後。この数値は、学内での異文化接触の機会が、日本の街中におけるより遙かに多いということを意味している<sup>6)</sup>。異文化交流への消極性は、国際理解専修の学生でも大して変わらない。基礎ゼミで6月に催した留学生との交流会でも、学生の反応は概して淡泊で傍観的であった。

キャンパスで共存状態にある外国人を無視して生きるのは不自然であり、また、もったいない。少なくとも必要やチャンスがあった場合には、閉ざすことなく積極的に係わっていった欲しいと願うが、彼らにはまさにその意識が欠けているように思われる。そこで、学生たちが、今のキャンパス環境を多文化との共生環境に転換させて、せつかくの機会を有意義に生きるためにも、この当事者意識への道を啓くことが目下の急務と考えた。

#### ②「身近な次元に引きつけて考えさせる」：

では、なぜ学生は異文化交流に対して消極的なのか。根深い所では、あるいは集団主義、閉鎖性、差別意識など、日本人特有のムラ意識的なものが関係しているのかも知れないが、逃げ腰という点からいえば、「異文化」ということを大層なものと捉え、その壁の前で構えてしまうからなのではないか。文化の壁は所詮越えられないものと考え、無理に越えた時に生じるであろう誤解や摩擦といった厄介なことに恐れをなして、試す前に諦めてしまっているように見える。

しかし考えてみれば、人間はすべて何らかの文化を持っており、一人ひとりが異文化の持ち主である。一人ひとりとは違ってこそ当然であり、それがこの世に二人とないユニークな存在としての個人の個性となる。人間社会には、誤解や摩擦もあって当然、我々はみなその中で日常生活を送っている。自分以外の人と接することはそれ自体、異文化と接することなのである。金沢吉展も指摘するように「異文化との接触」と言う場合、それは「実際には、自分と異なる文化背景を持つ人間を相手にすることを指しており」<sup>7)</sup>、交流とはそもそも人と人が行なうものである。それゆえ異文化交流とは、つまるところ、いわゆる対人関係と変わりはないといえる。

このように、国際次元における異文化接触というものを、ふつうの人間関係という普遍的かつ身近な次元に結びつけて、自分とのかかわりの中で実感的に考えさせることにより、学生の異文化交流に対する抵抗感やアレルギーを取り除くことを目指す。

③「個人を基本単位とする多文化共生への視点」：異文化理解において、「個人」に基点をおき、異なる人々との「共生」を志向する立場は、現在の国際理解教育が展望として見据えている「多文化共生の教育」の視点と方向を一にするものであり、本授業の内容は、まさにこの動向を視野に入れて構想されたものである。では、日本の国際理解教育における理念とはいかなるものか。そのヴィジョンの概略を以下に記しておく。

日本の国際理解教育は、1990年前後に起きた国際的な枠組の大変動を境に方向転換を余儀なくされた。今日掲げられている理念は、これ以後の時代趨勢の中で新たに構築されたものである。それまでの日本がとっていた国際理解教育の路線は、「文化＝国家」という枠組を前提とする、国家論的な視点に立った「ナショナリズムとしての国際理解」であった。その目的は異文化との相対を通して国民国家としての「ナショナル・アイデンティティ」を確立し、また国際社会で活躍する「国際的な日本人」を育成することにあった。

しかし、東西冷戦構造の崩壊やグローバリゼーションなどの社会変化に伴って、国民国家の枠組が揺らいでしまうと、従来の方向での教育では立ち行かなくなる<sup>8)</sup>。そこで国際理解教育は多様な方向への模索を始めるが、その中で今後の重要課題として浮上してきたのが、「国」意識を離れた多文化共生の教育という方向である。

多文化共生の教育とは、異文化を多元的に扱う多元主義を前提に、そしてそれを貫く理念として共生を掲げる教育方針であるが、さらにこの共生の概念は、ユネスコ21世紀教育国際委員会の報告書『学習：秘められた宝』に則って、おおよそ「自己との共生」「他者との共生」「環境との共生」という三つの次元に分け

られている<sup>9)</sup>。共生の基本は「自己を知ること」すなわち「個の発達」にあり、そのうえで「自己と他者との関係を築くという対話的過程」に向かうべきとされる。

個人を共生の基本単位とするのであるから、「他者」もまた個人が基点となり、従って、交流の基本も、身近な生活レベルでの対話による個人（自己）対個人（他者）の関係性の構築にある。こうして「他者との共生」では、民族や国籍とはかぎらず、文化や生活など様々の次元で背景を異にする多様な人々と交流し、違いを認め合い、相互に理解を深めていくことが求められる。そしてそのことを通して新しい生活環境を作り上げていくことが「環境との共生」なのだとされる<sup>10)</sup>。

#### ④「主体的な演習授業」：

本授業は、組み合わせに変化は生じるものの一貫してグループ単位の演習形式で行なう。そのねらいはまずは、一つの目標に向かって共同作業をこなしていく中で、最も身近な仲間との人間関係というものを見つめさせることにある。異文化交流とはけっして、特殊な状況における、日常から離れたことではないということを身をもって実感させる。同時に、グループ学習を通して、課題について学生たちが自ら考え、その結果自ら答えや真実に気づいていくよう誘導する。それは彼らにとって必ずしも新知識である必要はなく、単に確認であってもよい。異文化理解をめぐる課題への思考や探究を進めていくことで、彼らがこれまで蓄積してきた異文化理解の知識を呼び覚まし、それを交流との関連性の中に位置づけていこうとする意志がすでに、異文化理解への問題意識を主体的に持つことになっている。

### 3. 授業実践のアウトライン

#### 3. 1. 二つのプログラム

学生に、異文化交流の根本は対人関係であることを気づかせ、そして、その関係をうまく作っていくための接し方を主体的に考えさせるには、どのような方法が有効であるか。この目的に適うものとして、授業は、共に「コミュニケーション」を基盤としつつも、表面的には内容、プロセスとも全く異なる二つの作業で構成し、これらの実践を出発点に、学生を、人間関係から異文化間コミュニケーションにおよぶ問題領域への思考と討議へと導くこととした。その一つは、コミュニケーションそのものを素の状態に取り上げる、一種シミュレーション的な「コミュニケーション・ゲーム」のワークショップであり、もう一つは、これとは対極的ともいえるべき、その日常がまさに多文化に覆われた異文化交流実践の場に他ならない「国際結婚」についての検討である。

##### ①コミュニケーション・ゲーム：

コミュニケーションは複雑な現象である。しかし授業で目指すのは、この現象の複雑さを学問的に分析して解明することではなく、その原理を実際のゲーム体験によりいわば感覚的に洞察させることである。つまり、コミュニケーションとは何か、いかなるものか、これをうまく運ぶには何が必要で、どうすればよいか、等々を、本質的な次元で考えさせ、把握させる。

ゲーム内容は、非言語的コミュニケーション手段によるもの、言語的コミュニケーション手段によるもの、双方を含む。前者においては、様々なうち、身体の接触、および身体の動きによるコミュニケーション手段を用いる。一方、言語的コミュニケーション手段を用いたゲームについては、一応言語は使うが、そのコミュニケーションのあり方はいかなれば限りなく感覚次元に近いものである。

いずれにせよ、双方のゲームとも、論理というよりはイメージを共有空間とする類のコミュニケーションに依拠するものと言える。学生には、こうしたゲームの実践を通して、体と体による対話のあり方、および想像力と勘の働かせ方を探らせ、またそれによって、相手との関係のつけ方やとり方、さらに調整の仕方について検討させる。それはすなわち、相手のコミュニケーション・システムを的確に捉え、そこにいかに参加していくか、ということになる。

ゲームは5種類行なった。以下に各々の内容を実施順に記す<sup>11)</sup>。

a.「背中合わせ立ち上がり」：二人の人物が背中合わせで腕を組み合い、両脚を伸ばして座る。その態勢のまま立ち上がる。

b.「真ん中の人間揺らし」：三人一組で、両端の人物が向き合って立ち、その中央に、残る一人がどちらかを向いて立つ。後方の人が真ん中の人の背中を押し、倒れなかった所を反対側の人物が支える。中央の人はされるがままになっていること。次は同じことを逆向きに行なう。

c.「球なしキャッチボール」：二人の人物がボールがあるつもりでキャッチボールの行為をする。

d.「縄なし大縄」：縄があるつもりで大縄飛びをする。

e.「ご旅行ですか」：列車の中、対面式の4人掛けの座席。同行の二人が談笑している。そこへ別の一人が「ご旅行ですか」と話に割り込む。

## ②「国際結婚」をめぐる考察：

「国際結婚」は、今日、英語圏では「異文化結婚」と呼ばれることも少なからずあるように、国境というより文化の差異に基準をおく視点から認知される傾向がある。結婚という共同生活においては、国籍の違いよりは、言語、宗教、民族、階級、地域、人種などといった文化的な違いの方がよほど現実的な障害になるということなのであろう。また多民族化がすすむ国々

においては、同国人同士の結婚であっても、そうした異文化的な問題をはらむ「異文化結婚」が増えている事情もあるという<sup>12)</sup>。

しかし考えてみれば、元来男と女とは、性差に根ざす異なる文化背景を持った存在である。その意味では、R. プレーガーとR. ヒルも認めるように、すべての結婚が異文化結婚であるといえる<sup>13)</sup>。「国際結婚」とはすなわち、国籍も異にする夫と妻の大形な異文化交流実践の場ということになるが、授業ではこれをその基本にある夫と妻の個人的関係、ならびに結婚と彼らを取り巻く家族の関係から、考察していく。学生にとって結婚は、今はまだ実感はないにしても、将来向き合うことになる身近な問題である。また国際結婚とて、近ごろの日本人における国際結婚の急増ぶりをみれば、まったく無縁な話でもあるまい。

教材として、制約ある時間の中で敏速に読めるということで、「国際結婚」をテーマにしたこれまた若者には身近な漫画を用いる。近年日本では、国際結婚に関して、経験者によるノンフィクションの出版が相継いでいるが、その中に漫画も何種かある。今回はそこから、外国人を夫に持つ漫画家が、自らの結婚およびその周辺事情を実録した3つのシリーズを使うことにした。

・流水りんこ『インド夫婦茶碗』5巻本

・高橋由佳利『トルコで私も考えた』4巻本

・小栗左多里『ダーリンは外国人』2巻本<sup>14)</sup>

国際結婚急増の背後には、それと比例して増加する国際離婚の現実もある<sup>15)</sup>。取り上げた作品群は当然なことに、その結婚がこれまでのところ成功している事例だということである。どの作品も、作者自らの結婚生活が、客観的かつ批判的な視線を通したコミカルタッチで描かれており、テーマはしばしば夫婦間に生起する様々な葛藤や軋轢にかんする言及や考察にも及ぶ。必ずしも充分とはいえないが、そうした国際結婚が内包する異文化間の摩擦の問題を、夫婦二人がうまく調整して共生への道を探っていくプロセスを、読者は目の当たりすることができる。そしてそれは非常にしばしば、文化の違いよりも、個人の性格の違いに起因するのであることを喚起させるような描出になっている。同時にそこには、国際結婚にまつわる諸々の問題点の提起、その他考えさせる材料にも事欠かない。

これらが、学生に、文化の調整のあり方や人間関係へのかかわり方を肌で感じさせることのできる教材であることは間違いない。そこにはまた、夫の国の文化についての紹介や日本との対比的言及もあり、学生は、異文化交流の前提として相補関係にある異文化理解の「認知的局面」についても視野を広めることができる。

授業では3つのグループにそれぞれ漫画の1シリーズを与え（本は事前に全作全巻を1部ずつ研究室で調達済み）、各グループ責任のもとに行なわれる担当作

品の内容要約と発表、および全体での討議を組み合わせて進化した。このプログラムはまた、その進行過程において付随的に、要約力、表現力、思考力、および自・他の相互理解に結びつく言語によるコミュニケーション技能の育成をも、ねらいの射程にしている。

### 3. 2. 展開と経過

・対象学生：総合教育課程・国際理解教育専修1回生13名（男子4、女子9）

・時間：1回1時間30分×4回

・場所：56名収容用の教室

各回の概要は以下の通り。

#### <第1回目>

(1)コミュニケーション・ゲーム：当日は動きやすい服装で集合。全ての机を教室後部に移動させたのち、目的や意味や理論などに関する説明は一切なしに、いきなりa～eの各作業を順次体験させる。

a.「背中合わせ立ち上がり」：体感により相手とコミュニケーションをとるゲーム。男子ペアは早々と成功を決めたが、女子は組によってはなかなかコツが掴めず手間取った。

b.「真ん中の人間揺らし」：中央の人が脱力状態であるためには、前で支えてくれる人を信頼していなければならない。その恐怖感を払拭してやるために、まず筆者が支え役を演じてみせた。中央の人物がメッセージとすれば、前後の人物はその送り手と受け手。どういう押し方をするかで、返す方の力の入れ方が変わってくる。

c.「球なしキャッチボール」：見えない球のキャッチボール。受け手は投げ手の手や体の動きから、その球の速さ、高さ、着地点等を読まなければならない。移動する球のイメージを二人で共有することが求められる。最初どうもうまく行かないので、実際の物を放らせてコツを探らせた。

d.「縄なし大縄」：両者の運動に時間差があるためイメージしにくいキャッチボールとは違い、参加者が全員、同一のリズム・イメージで行なう大縄跳びは、合わせやすかったようだ。二つのグループに分かれて行ない、いずれも見事な跳びっぷりを披露した。

e.「ご旅行ですか」：二脚ずつ対面式に置かれた椅子に3～4名を座らせ、うち一人を残して自由に談笑させる。男子4人がそれぞれその一人として、話に割り込む闖入者を演じた。一人は携帯電話をわざと落として相手の気を引き、それに乗じて「ご旅行ですか」。一人は話題が阪神優勝に及ぶや、そこから話に加わり、ややしてから自然に「ご旅行ですか」。一人は話を「すいません」と言って強引に中断させ、「ご旅行ですか」。最もイメージしにくいのが人間の心の中ではないか。最初に試みた学生は必死で機を伺ったが、つい

に割り込めなかった。

全ての作業を終了後、ゲームを振り返って解説し討議に付す。

(2)漫画本の配布：全体を3つのグループに分けて名前をつけさせ、それぞれに任意の漫画1シリーズを配る。宿題として、配布された漫画を各グループ内部で回覧して読んでくることを課す。

#### <第2回目> 「国際結婚」をめぐる考察：

・グループに分かれ、各担当の漫画の概要をまとめる（内容紹介の目的）。

・その概要をグループごとに口頭発表する。

・発表内容についての質疑応答とコメント（各内容を明確化し掘り下げるため）。

・宿題：メモ程度であった概要を文章化する。グループでの共同作業とし、各代表が次回授業前日までに添付ファイルにて教師に送信する。

#### <第3回目> 「国際結婚」をめぐる考察：

・受信した3グループの要約のコピーを全員に配布し、それに基づき、内容についての更なる質疑応答とコメント（各内容についていっそう理解を深め、問題点を炙り出すため）。

・教師から、各要約に関する講評と要約の作り方についての指導（漫画の未読者に内容が正確に伝わるような表現の仕方をアドバイス）。

・グループに分かれて、自分たちの要約を再検討する。

・宿題：作品を再読して要約を改善する（再読に際して、特に夫婦間や国際間人間関係の関係性の変化に留意して読むよう指示。また要約には意見や感想も加えるよう指示）。グループの共同作業とし、次回授業の2日前までに各代表が教師に送信すること。教師は受信し次第、それらを全員に転送し、学生は各自印刷して予習し、次回の授業に臨む（情報の事前共有）。

#### <第4回目> 「国際結婚」をめぐる考察：

・要約改訂版についての教師の講評（どのグループの要約にも格段の向上が認められた）。

・3つの「国際結婚」を比較しながら、要約に付け加えられた意見や感想も参考にして、異文化理解のあり方や問題点、解決の方向などをめぐり自由に討議する。

## 4. 成果と考察

4回の授業を終えて、当初の目的は十分に達成されたと評価しうる。各課題に対して学生たちは、身体と言葉で、個人であるいはグループで、しっかり考え抜いた。学生たちはそうした主体的な考察過程の中で、異文化理解にまつわる様々の重要事項や問題点に自ら気づくという実践的な体験を通して、確実に、異文化

交流の実践への意欲に目覚めたと見える。その成果を、以下に挙げるグループ単位の漫画の「要約（所感を含む）」と、4回終了後に提出された個人レポートからの抜粋を通して確認しておきたい。

#### 4. 1. 漫画の「要約」から

##### ①『インド夫婦茶碗』（インディーズ・5名）：

このグループは「国際結婚」に対して抱いていた先入観が、この夫婦の前向きな努力によって次々に突き崩されていくさまを興味深く観察している。そして、それらの事例を詳細に検討した後で次のように結論する。

○「結婚とは結局個人間のものであるという事だ。日本人は特に“国際結婚”ということばをつくる程に国籍の違う者同士の結婚を特別視しがちである。だが、国籍は違えど夫婦喧嘩は結婚生活につきものであるし、家事の分担や子育てなどは、世界中どここの家庭でも起こっている問題だ。確かに国籍が違えば文化的背景も違い、共同生活において戸惑いなども生じるであろう。しかし、この夫婦の様に互いの文化や考え方を融合させたり、場合によってはどちらかの意見を立てたりと、上手く生活していけるのである。それは、“互いを受け入れ合う”事で可能になるのだろう。国籍がどこであろうが、(…)結婚というものは人間関係の問題だという事を、この本を通し知る事が出来た。作者はこの本の中で「親が子を思う気持ちはどこの国の人間でも同じである。」「結婚生活で大切な事は、相手を思いやる気持ち、理解しようとする姿勢だ」と述べている。国際結婚をテーマに考えてきたが、もっと身近な人間同士の関わり合いについて考えることが出来た。」

②『トルコで私も考えた』（チーム黒くま・4名）：これは一見トルコの文化紹介を前面に打ち出したような作品であるが、それで終始しているわけではなく、折りにふれて、夫婦関係や作者と夫の実家周辺との姻戚関係のありようについての描出、考察もある。

○「トルコにおける国際結婚は日本ほど大げさなものではないらしい。トルコは多民族国家であるために異文化などは特別なものではないのであるようだ。トルコでの夫婦生活で大切なのは家族とのつながりと、近所づきあいであるらしい。トルコの人々は人と人とのつながりを大切にしていることを強く感じた。作者の生活を見て、国際結婚というものはただ国籍が違うもの同士が結婚した、というだけであって人と人との付き合いにはそういうものは関係がないことがわかった。(…)この本は単にトルコを紹介することだけを目的として書かれたわけではなく、読者が少しでもこの本を通して国際理解について考えることができれば、という著者の思いが込められているのではないかと感じた。確かにトルコと日本では、習慣や文化、宗教など、さまざまな面で違いがある。しかし(…)根

本的な部分ではつながっているものであり、その違いを夫婦でお互いに認め合えば、うまくいくのだということがこの本から感じられた。(…)重要なことは、どちらかに統一することではなく、違いを認め相手を理解する気持ちを持つことではないだろうか。」

##### ③『ダーリンは外国人』（ダーリン・4名）：

夫がジャーナリストであるためか異文化理解への意識が高く、日常的に異文化接触をめぐる問題を議論しているような夫婦が主人公。3シリーズ中、この問題を真っ正面から扱った唯一の作品。

○「夫婦間でお互いの文化・環境の違いからいざこざが起きたときは、自分の意見や自分の文化・風習などを押し付けることなく、お互いに譲歩しあうことが大切だということや、日本人が何気なく使う謙遜表現は外国人にとっては珍しいこと、そして男女についての考えの違いなど、日本と他の国とはいろいろなことが違っていて、見直し、見習わなければならないことなど、日本人だけでは気づけなかったことに気づいた。(…)私たちが不思議に思い、その関心を最も引いたのは、日本で未だに残っている、外国人差別の事である。日本で国際結婚する人たちが増えてきているというのに、なんと驚くことに日本の婚姻届には外国人は夫・妻の欄ではなく「備考」の欄に名前を記載しなければならないというような事態が未だに日本にはあるという事である。それだけではない、不動産屋などでは外国人という理由だけで入居を拒否されることがあるのだ。これは確実に外国人差別であるし、経済的先進国であり、おそらく外国人が出入りする率が高いであろうと思われる日本の外国人を受け入れる体制がこのようなひどい状態であること、自国の事でありながら、恥ずかしく思うし、いち早く改善されることを願う。(…)色々問題はあるだろうけど、この二人を見ていたら、とても幸せそうで(…)、二人の愛の強さがあれば、そういう文化や生活習慣の違いがどうのこうのとかいう問題から出来上がる「壁」は軽く乗り越えられると思った。」

#### 4. 2. 個人レポートから

課題は、1.「自分と世界（他者）との関係をどのように作っていくか」2.「授業で実践した2つのプログラムの関係性について」3.「授業全体に対する考察と感想」の3つについて、何れか1つないし複数を選び、「要約」や授業中の議論も参考にしながら考察しまとめる、というもの。全体としてレポートからは、当方の教育意図や方針や展望が、学生には公表していなかったにも拘わらず、正確に捉えられ、また納得しながら受け止められていると同時に、内容についての理解も深まっていることが伺われ、この授業が方法的に成功したということが出来る。

○「私は(…)授業を通して、国際理解や人間同士

の関わりについて深く考え、今までの自分の考えを見直したりすることができたと思う。授業形態が、自分たち自身が体を動かしたり、国際結婚についての漫画を読んだりというものであったから、とても入っていきやすかった。(…) 1 番最初にペアで背中を合わせて座った状態から立ち上がるというのをやった。私は最初見えて、うまくできていないペアに「お互いが相手に体重をかければよい」というアドバイスをした。すると、ずっと立ち上がることができていた。後から先生の話で「お互いのことを信頼していなければできない」ということを聞いて大変納得させられた。(…) わたしの意見を実行してくれたのも、(…) 信頼があったからだと思う。さらに、みんなで大縄を跳んでいる演技をした時には、初めは何のためにこんなことをしているのだらうと思っていたが、先生の「みんなに共通のイメージがあったからこそうまくいった」という言葉を聞いて、また納得させられた。そう考えると、コミュニケーションとはもちろん言葉も大事だけれど、体を使うことや、心の疎通がとても大きな役割を果たすということになる。」(Y.M)

○「この授業を終えて、ようやく第一回目の体を使って行った授業で先生がおっしゃった「協力する」とことや、「イメージを共有する」とこの意味がわかった。そしてこれが、いろんな人と一緒に生きていくために、本当に重要なことであるということがよくわかった、また、マンガを通して、外国の文化などが学べたのはもちろん、そこで日本の文化も相対化して改めて見ることができたので、今まで気づけなかったことまで学ぶことができた。そして、教科書ではなくマンガを用いたことで、非常にその世界に入りやすく、すぐに取り組むことができたこともこの授業の良かった点だと思う。今回、真剣に考えられたおかげで、みんなのいろんな意見を聞くことができ、大変勉強になった。」(Y.I)

○「授業を通して私は異文化理解について興味を持った。きれいごとのように、「他の国の事情を理解して、文化、習慣を受け入れる」ことが国際理解なのだろうか。受け入れることだけでなく、受け入れてもらう、相互の理解が必要だと私は思う。そういう考えもきれいごとには聞こえるが、同じ地球に生まれた人間なのだから、そんなに難しいことではないと思う。(…) では、本当に異国の文化を受け入れることができるのか。自分の問題として考えていかなければならない。もし言葉が通じなかったら…これは、授業の初めの方で体験したことで、言語 (… ) ではなく体と体によるコミュニケーションを試したものだ。互いによく知った友達同士でも、最初は一緒に作業することが難しかった。ならば、全く知らない人同士だったら、も

っと時間がかかるだろう、まして他国の人ならばさらにだろうと思う。」(Y.N)

○「この授業を通し、国際的な問題から人間関係まで、色々なことについて自ら考え、意見を発表し、また他者の考えを聞くことができた。グループディスカッションでは、考え方のすれ違いや食い違いも多々あったが、自分の考えを深めたり、物事に対する新しい見方を発見するよい機会になった。自分と世界の間をどのように築いていくか—この問題に対して未だ明確な答えは出ていないが、これからの人と人とのかわりの中で考え、何らかの答えを見出していきたいと思う。」(H.Y)

○「近い将来、私は仕事に就き、今よりもっと多くの人たちと出会い、関わり合っていく。そんな時、この授業で自分が感じ、学んだことは一番大切なこととなるだろう。今感じていることを今だけのものにせず、これからの日々や将来に繋げていきたいと思う。」(R.K)

## 5. 結び

「基礎ゼミ」の枠内で実施した筆者の「異文化間コミュニケーション」の授業の目指した方向は、第一に、学生の異文化交流に対する当事者意識の開明、第二に、実際の接触現場における行動を司る意識のあり方への思考の開明であった。そのためにまず、異文化接触とは本質的には対人関係であるとの視点から、能動的な人間関係の構築に向けて、人間関係の仕組みや取り方について実践体験により考えさせ、次いで、「国際結婚」のノンフィクション漫画を教材に、その日常的な異文化交流実践の場をいわば追体験させることを通して、多文化の渦中においてどのように関係を調整すべきか、その可能性について検討させた。

異文化理解教育の内容をかりに「知る形」での教育、「考える形」での教育、「生きる形」での教育の3段階に分けるならば<sup>16)</sup>、本授業の内容は2番目の「考える形」での教育に該当し、実際の現場に臨むに際しての意識の準備過程であったといえる。受講した学生は次年度「総合フィールド演習」の授業で、外部のボランティア組織に出かけ、そこで国際理解・国際交流についての実地研修を受けることになっている。今回の授業で助走のついた意識を、そうした研修の場で十分に有効活用してほしいと願うと同時に、日常的にも、例えば学内の留学生との交流を結ぶなどして、積極的な自己実地訓練を積んでいくことを願う。そして、そうして培ったものは、彼らの卒業後の社会生活にも大いに役立つことであろう。

去る2005年10月20日、第33回ユネスコ総会で「文化

多様性条約」が、アメリカとイスラエルの反対、豪州など4カ国の棄権の中、日本を含む148カ国という圧倒的な賛成を得て採択された（30カ国の批准で発効）。世界は今、便宜上は効率的なグローバリゼーションの道を展開しつつも、それとは別個に人々の心には、個々の文化を大切に思う文化多元主義的な視点も確実に育っているのである。こうした多様な文化が相互交流を重ねながら共に生きていくことはすばらしいことだが、それには個々の人間において絶えざる努力が求められよう。

こうした中で、ともすると異質なものに対して抵抗を覚えがちな島国根性の日本社会にとっては、これは特にまじめに取り組まねばならない課題である。異文化接触によって、相手を同化させようとしたり、または反対に、無批判に相手の言いなりになったりするのではなく、双方の納得の下どう折り合いをつけていくかを模索する、調整への意欲を持ちつつ、その中で自分はどう変わればよいのか、どのように変わりたいのかを常に問い続けながら、オープンで建設的な視野と思考へと向かう姿勢が必要なのではないか。このような姿勢を培うべく今回筆者が試みたような切り口からの教育は、これからの国際社会を担っていく学生にとって、きわめて有意義であろうと考える。

## 注

1) 異文化理解の英訳は、intercultural understanding、cross-cultural understanding、どちらでも可能のようである。字義通りにはinterculturalは「文化相互の」、cross-culturalは「文化を交差する」の意となるが、両者の定義は使用者により異なるという。本論の英語タイトルにIntercultural Understandingを用いたのは、本タイトルの趣旨と同義で用いられている、日本ユネスコ国内委員会による『国際理解教育の手引き』（下記注3）参照）中の表記「国際理解とは文化間の相互理解[Intercultural Understanding]（異なった文化と文化との間の相互理解）だといえる」に準じてのことである。Cf. 古田暁監修、後掲書、p.6；鍋倉健悦『異文化間コミュニケーション入門』丸善ライブラリー、p.2。

2) 『新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える～』開発教育協議会・（財）神奈川県国際交流協会、2001年。これは、「貿易」を疑似体験させることで世界経済の基本的な仕組みを学ばせ、そこに潜む様々な問題点とくに南北問題に気づかせて、その解決策を考えさせるのが目的の教材である。

3) 日本ユネスコ国内委員会『国際理解教育の手引き』東京法令、1982年。

4) 臨時教育審議会『臨教審だより』20号、1986年。

5) 古田暁監修『異文化コミュニケーション[改訂版]

新・国際人への条件』有斐閣新書、1996年、p. 257。

6) 法務省入国管理局ホームページによると、外国人登録者総数は平成16年度末現在で、197万3,747人で、前年に引き続き過去最高記録を更新している。これは、わが国総人口1億2,768万7,000人（総務省統計局の「平成16年10月1日現在推計人口」による）の1.55パーセントに当たる。

7) 金沢吉展『異文化とつき合うための心理学』誠信書房、1992年、p.76。

8) 佐藤郡衛『改訂新版 国際化と教育』放送大学教育振興会、2003年、pp. 117-120。

9) ユネスコ「21世紀教育国際委員会」『学習：秘められた宝』（天城勲監訳）、1997年、ぎょうせい、pp. 66-76。

10) 佐藤郡衛、前掲書、pp.127-129参照。

11) このゲームは、演出家平田オリザが朝日新聞主催の「オーサー・ビジット」で用いていたもので、芝居を創る視点から、芝居への導入目的で考案されたものである。本授業の目的は演劇にはないが、「対話」について考えさせるための教材として有効と判断したため、借用した。追試の結果は、本文中で後述のように、きわめて効果的であった。平田のワークショップについては、朝日新聞社『オーサー・ビジット』2005年春号[小学校編][中高編]に概要紹介がある。Cf. 平田オリザ『対話のレッスン』小学館、2001年。

12) ローズマリー・ブレイガー、ロザンナ・ヒル編著『異文化結婚 境界を越える試み』新泉社 2005年、pp.302-307。本書の監訳を担当した吉田正紀によれば「国際結婚」という名称は今日、intermarriageないしmixed marriageから、「異文化結婚」を意味するcross-cultural marriageないしintercultural marriageへと移行しつつあるという。因みに本書の原題はCross-cultural marriage。

13) 同上書、p.23。

14) 流水りんこ『インド夫婦茶碗、1～5』ぶんか社、2002年～2005年；高橋由佳利『トルコで私も考えた、1～4』集英社、2002年～2005年；小栗左多里『ダーリンは外国人、1～2』メディアファクトリー、2002年～2004年。

15) 松尾寿子『国際離婚』集英社新書、2005年、pp.30-35。

16) 森亘他『東京大学公開講座 異文化への理解』東京大学出版会、1988年、pp.305-306参照。